

「宗教と環境」研究会を開催

佐藤孝則

第9回（5月9日）

第9回目のテーマは「環境ボランティア活動と宗教者の役割」で、最初に、ネパールで活躍されている Love Green Nepal (LGN) 代表のアミラ・ダリ (Amira Dali) 氏に、「ネパールでの環境保全活動の実践」と題して発表していただいた。

このLGNは、ネパールの自然環境を守りたい、ネパールの森を守りたい、村人の森に対しての依存度を縮小したい、女性を過剰肉体労働から解放したい、という目標を掲げ、1991年にネパールで設立された環境NGOである。

活動内容は、植林、バイオガスの普及、教育普及、持続性可能な農業の普及の4つを中心に活動をおこなっている。

植林事業としては、Community Forestでの植林、農家や各家庭による植林、学校や公共施設での植林を重視し、日本のイオン財団からの助成を得て実施した。

バイオガス普及事業では、家畜の糞尿を発酵させてできたバイオガスを、煮炊き用のエネルギーとして積極的に活用することを奨励している。それ以前のように、煮炊き用の薪として木が伐採されないようにするためである。ネパール政府もこの事業を積極的に支援し、経費の半分を国が負担している。

教育普及事業としては、校舎を建築し、女子に就学の機会を与えるため、毎年のように奨学金を出し、週1回のリーダーシップのトレーニングもおこなっている。とくに、植樹をおこなうことの重要性を教育の中でおこなっている。

持続性可能な農業の普及事業としては、農業の普及拡大にともない、農業事故による身体被害が急増していることから、農業の適切管理と適量散布を指導している。

以上の結果、薪拾いにともなう女性の労働時間の短縮だけでなく、1軒あたりの家族が1年間に使う薪の量、約2トン分が節約されている、とアミラ氏は述べた。



第10回（7月12日）

第10回目のテーマは「森林保護と宗教者の役割」で、最初に、秩父神社宮司で京都大学名誉教授の藺田稔氏に、「社叢文化を軸としたマチづくりの構想」と題して発表していただいた。

はじめに、「文明 civilization」のグローバル化と「文化 culture」の国際化について説明した。

そして、「文明」は“都市”という概念で、古代都市を意味していた。田舎ではなく、大地から離れた場所にあるとした。一方「文化」は本来“大地を耕す”という意味だが、その中には見えないものを祭る、身を着飾るという意味もある。基本は農耕で、大地とのつながりで生まれるもの、地域としてのアイデンティティがあるもの。それゆえ文化が消えると民族・人種も消えると考え、異文化を理解しあうことが必要だと説いた。

柳田國男は明治42年2月に講演した「町の経済的使命」（『時代ト農政』第3章、明治43年刊）の中で、ヨーロッパのマチは日本のマチとは異なる、前者の町は自然から隔絶しているが、後者は自然と交流していると述べた。

そこで藺田氏は、日本では死者と生者が共存しているのがコミュニティで、“ふるさと性”を維持してきたと説明し、オギユスタン・バルクを考えを一例に挙げた。バルクは自然を「風土」としてとらえ、この「風土」の概念は欧米にはない、またこの「風土」には「カミ」の概念も含まれると考えた。

また、「文化」に内在する霊性感覚についても紹介し、その中で「カミ」とは遮られて見えないところ、見えないもので、例えば、下流から上流を眺めるさいの目に見えないところ、目に見えないものが霊的なものと説明した。すなわち、隠れて見えないものが「カミ」であると述べた。

そして、「カミ」が宿る神社は、基本的に背後に霊山を背負い、前方に集落を望むパターンで、神社が正面に霊山を望み、間近に集落を抱えるパターンもあると解説した。このような社叢文化を軸としたのがコミュニティ景観で、そのような視点でのマチづくりを考えるのも大切だと説いた。そして、社叢はディーブ・エコロジーの文化的拠点であるとも説いた。

以上が藺田氏の発表内容で、おやさと研究所からは佐藤浩司研究員が、「山は高いがゆえに尊からず—宗教と環境—」と題して発表した。



第11回（9月6日）

第11回目のテーマは「環境思想と宗教者の役割」で、最初に、東洋大学学長の竹村牧男氏に、「己事究明としてのエコ・フィロソフィ」と題して発表していただいた。

はじめに、発表の基本的な考え方として、①科学・技術の進展による解決（省エネ・無公害技術等の開発。地球システム）、②社会システムの変換による解決（循環型社会への移行。社会システム）、③ライフスタイルの転換による解決（人間の欲望の抑止。行動レベル。人間システム）、④人間観・世界観の確立による解決（生きる目標の自覚。思想レベル。文化システム）の4点を挙げて説明した。

そして、「唯識思想の立場」から説明をおこなった。唯識思想では、まず心（識）があつて、その中に身体と環境とが維持され、そのうえで見たり聞いたり、環境に働きかけたりがなされている。そしてその総体が一個の人間、自己だという。身体は環境と循環・交流してはじめて生命を維持しており、身体と環境はセットで、そこに一個の生命を見出すべきだというのが唯識思想である。再評価されてよいのではないかと述べた。

続いて、「日本天台思想の立場」について解説した。「草木国土悉皆成仏」、この句は『中陰経』に出るとされるが、実際には『中陰経』には存在しない。この句の初出は、安然（841～915）の著作の中にあるとされ、日本で作られた、と説明した。

最後に、「ディーブ・エコロジーにおける自己の問題」について解説した。そして、アラン・ドレクソン・井上有一共編（井上有一監訳）『ディーブ・エコロジー—生き方から考える環境の思想—』（昭和堂、2001年）を引用して説明した。

その中で、ディーブ・エコロジーを提唱したアルネ・ネスのエコロジカルな人間存在のあり方に関して、「人間は自分の持つ可能性を過小に評価している」、「自己実現が進むにつれ、生によるこびや意味も深まっていく」などと述べた。

以上が竹村氏の発表内容で、おやさと研究所からは幡鎌一弘研究員が、『己事究明としてのエコ・フィロソフィ』へのコメント」と題して発表した。

